

弘治司馬印全集

第八卷



谷崎潤一郎全集 第八卷

定價一三〇〇圓

昭和四十二年六月二十四日初版發行
昭和四十八年五月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

目次

愛すればこそ	一
或る罪の動機	二二
奇怪な記録	二五
蛇性の姪	一四九
青い花	二三
永遠の偶像	二四五
彼女の夫	二六九
お國と五平	三七
本牧夜話	三五二
愛なき人々	四五

白狐の湯

アエ・マリア

五〇三

四七三

愛すればこそ

三幕

大正十年十二月號「改造」、大正十一年一月號「中央公論」(續稿原題「墮落」)

人物

橋本牧子 或る高官の未亡人

圭之助 牧子の長男

澄子 圭之助の妹

三好數馬 圭之助の友人

山田禮二 澄子と同棲して居る男

秀子 或る小劇場の女優

その他刑事一人、取次ぎの書生一人、カフェエの給仕女一人

時 現代

所 東京

第一幕

場面——橋本家の一室。日本間を西洋風に飾つた質素で雅致のある部屋。中央にテーブル、三脚の椅子、上手と

下手とに出口があり、正面向つて右手に肘掛窓がある。窓の前にデイヴン、花瓶を載せたティー・テーブル。

● 秋の日の午後、未亡人牧子が窓の前のデイヴンに腰かけて毛糸の編み物をしてゐる。下手より書生が名刺を持つて入り来る。

書生 奥様、あの、ちよつと、——

牧子 何？ どなたかおいでになつたの？

書生 はい、あの、唯今斯う云ふ人が見えまして、——

書生 牧子に近づき名刺を出す。牧子それを見ると心配さうな顔つきになる。

牧子 (低い聲でヒソヒソと云ふ) 此の人が私に會ひたいと云ふの？

書生 はい。

牧子 私にかい？

書生 はい、—— 決して御迷惑になるやうな事ではございませんから、どうか是非奥様にお目通りが願

ひたいと申して居ります。

牧子 (努めて冷静に) あゝさう、では會ひませう、此處へ通して下さい。

書生 畏まりました。(去らうとする)

牧子 あ、ちよつと待つて、—— 圭之助^{けいのすけ}は居るでせうか？

書生 はあ、いらつしやいます、お客様のやうでございます。

牧子 どなたか知ら？

書生 三好さんがお見えになつていらつしやいます。

牧子 三好さんなら構はないから、圭之助と一緒に直ぐ此處へ来るやうにさう云つて下さい。その後で此の人の通すやうにね、――

書生 はつ、承知いたしました。

書生 上手へ去る。牧子は何か考へつゞけつゝ編み物を置いて立ち上り、中央のテーブルへ来て右の椅子へかける。不安な様子。

暫くして上手より圭之助と三好數馬入り来る。二人共三十歳前後のまだ學生風の抜け切れない紳士。圭之助は和服、三好は英國風のじみな洋服。

圭之助 お母様、何か御用ですか？

三好 (牧子を見て會釋する) 今日は。御無沙汰いたしました。

牧子 あゝ三好さん、あなたもいらして下さつてほんとに好いところでした、――

圭之助 (三好と共にテーブルへすゝみ、牧子の左に來ながら) 何ですお母様、一體何なんです？

牧子 (名刺を示して) 今ね、斯う云ふ人が来て私に會ひたいつて云ふのですけれど、――

圭之助 (名刺を手につけて見る) ふん、……………(じつと考へる)

三好 (圭之助の手にある名刺を覗く) 刑事だね、――(さう云つて或る事を連想したらしく悲しさうに眼を曇らす)

圭之助 きつと山田の事です、外にこんな人が来る譯はありませんから。

牧子 私もさうだらうとは思ふんだけど、でもまあどんな事だらうね、――別に御迷惑は掛けないつ

て云ふんださうだが、かゝり合ひにでもなるんぢやないかね。

圭之助 かゝり合ひに？ そんな事があるもんですか、私たちは山田と何の關係もないんです！

牧子 だつてさうは行くまいと思ふ。山田とは關係がなくつても、あの子が居るんだから、――

圭之助 お母さん、どうか僕の前で、殊に三好君の居る前で、あの子などゝ仰つしやらないで下さい。もうあれは我が子とは思はないつて、いつかも御自分で仰つしやつたぢやありませんか。實は今も三好君とその話をしてゐたんですが、僕だつてあれを妹とは思つちや居ません。あんな奴は人間ぢやありません。三好 まあ君、そんな事を云はんでもいい、さう云つてくれちや僕が困る。僕は君が澄子^{すみこ}さんの悪口を云ふのを聞いたつて、決して好い心持ちやないんだから。

牧子 (涙ぐみながら) ほんたうに、いつも此れで困つてしまふんですよ。そりや圭之助の云ふのが尤もには違ひないんですけど、私の身になるとやつぱりさうも行かなくつて、――あれだつて大分此の頃は後悔して居るやうですから、今にきつと眼が覺めます、兎に角山田と切れてくれさへすればいいんだから。

圭之助 切れるものならもう疾^とつくに切れていゝ筈です、眼が覺める時機は今迄何度もあつたんです。

牧子 お前だつて、三好さんに義理を立てる積りなら、さう云ふ風に頭からあれを憎んでしまはないで、もう少しあれの爲めを思つてやつたら、――

圭之助 僕は、お母さん、僕は決してあれを憎んで居るんぢやないんですよ、あれの爲めを思へばこそ、

牧子 そりやさうだらうとも、それはよく分つてゐます、だけどね、女と云ふ者は一度あゝ云ふ風になると、ハタの者が手を貸してやらないぢや、中々自分で自分の身を救ひ出す事が出来ないんですよ。――

――なかに、あの子だつてお腹の中ぢやきつと氣が付いてゐるんだけれど、氣が付いた時分にはもうどうする事も出来なくなつて、ついずる／＼に引き摺られて行くものなんだから、放つて置くといつ迄立つても救ふ時期は来ないんです。

圭之助 しかし、私たちは今まで何度も手を貸してやつたぢやありませんか、さうしてその度毎にしくじつて居るんぢやありませんか。

牧子 けれどもあれはあの通り情に脆い性質で、山田を悪い奴だと知りつゝ、情愛に惹かされて居るんだから、そこを察してやらないぢやいけないと思ふ。

圭之助 情に脆いにも程があります、あんな、山田のやうな話にも何にもならない男を、假りにも愛して居ると云ふのが、僕には腹が立つんです。それほど情愛があるのなら、なぜ僕等のことを思つてくれないます。お母様の事や僕の事を、殊にお亡くなりになつたお父様の事を、――

さう云はれて、牧子は言葉なく俯向いてしまふ。

三好 澄子さんは、決して君たちを思つて居ない譯ぢやあるまい。澄子さんは、山田君がさう云ふ人間であればあるだけ、猶更それが不憫な爲めに捨てられないのだらうと思ふ。そこが澄子さんのいゝ所なのだ。……

書生下手より登場

書生 あのと、もうお通しゝても宜しうございませうか。

牧子（ちよつと狼狽して）あゝ、さうね、——ぢや、まあ何にしても會はなきやならないが、——ねえ圭之助、どんな話だか知れないが、兎に角お前も會つておくれでないか。かゝり合ひがないと云つたつて、若しもの事があれば結局ないぢや濟まされないんだし、内の名前が出るやうな事があつたら、やつぱり捨てゝ置く譯には行かないんだから。

三好 なあに、圭之助君だつて口では強く云ふやうなものゝ、お腹の中ぢや始終心配して居られるんです。ですからまあ、此の場合何も仰つしやらずに、兎に角三人で會ふ事にいたしませう。又その上でいろゝお考へもありませうから。

牧子 ほんとに、三好さんには飛んだ御迷惑ですけど、……（書生に向ひ）では直ぐ此れへ通すやうにね。

書生 は、承知いたしました。

書生退場

圭之助 三好君、君にはほんたうに濟まないな。

牧子 今日はあなたがいらして下さつたので、どんなに好都合だか分りませんわ。

三好 僕なんか一向お役には立ちませんが、——でも僕は、斯う申しては何ですけど、誰よりも一番よく澄子さんの心持を理解して居ると思ふんです。澄子さんを今の境遇から救ひ出して上げる——いや、救ひ出さないまでも、何等かの意味で幸福にして上げる事が出来れば、僕は及ばずながら、最後まで

で力を惜しまない積りです。それがせめてもの僕の心遣いこいつやなんです。

牧子 それほど迄に思つて下さるのが、分らないなんて、何と云ふ情ない人間なんでせう。

三好 いゝえ、そんな事はありません、僕の此の心持は、澄子さんだつてきつと分つて居て下さる筈です。僕はさうだと信じて居ります。

牧子 あなたのお心持が、萬分の一でも分つて居るなら、なぜあゝして居るのでせう。いつ迄あの男に喰つ着いて居るのでせう。どうせ刑事が来るくらゐだからロクな事ではないでせうが、あの男はいつか一度は監獄へ打ち込まれるやうな人間ですよ。私はいつそ、さうなつてくれた方が却つて都合が好いとさへ思つて居るのです。いくらあれが情に脆くつても、そんな事でもあれば思ひ切りよく別れられるでせうからね。

書生下手より「何卒此方へ」と云ひつゝ、刑事をつれて来る。三人挨拶すべく立ち上る。

刑事 (牧子に向ひ極めて慇懃に) や、今日はどうも突然お伺ひいたしましたこんにちして、飛んだお妨げをいたします。あの、何でございますか、失禮でございしますが、奥様でいらつしやいますか。

牧子 (高官の夫人らしい品位を保ちつゝ) はい、どうも大變お待たせしまして。

刑事 いえ、私こそ御無理をお願ひ申しまして、お會ひ下さいまして有り難う存じます。

牧子 (圭之助を指し) 此れは悴の圭之助でございします。

刑事 はあ、左様で、——初めてお目に懸ります。

牧子 それからあの、こゝにおいでの方は、圭之助のお友達で、帝大の理科の助教授をしていらつしやる、

三好數馬さんと仰つしやるのです。――

刑事と三好とが會釋して居る間に、牧子紹介の言葉をつゞける。

牧子――もう圭之助とは兄弟のやうにして戴いて、私どもの家族同様に御懇意に願つて居るのですから、どうかお構ひなく、こゝで御用向きを仰つしやつて戴きたいと存じますが。

刑事はい、あの、實はその――何でございます、――

牧子さ、どうぞお掛け下さい。

刑事に椅子をすゝめ、三人も元の席に直る。

刑事（腰かけながら）恐れ入ります、では御免蒙ります。――實はその、今日伺ひましたのは、表向きと云ふよりは個人の資格で御事情を承はつて來るやうにと云ふ署長の命令でございまして、それで御邪魔に上つたやうな次第でございますが、――

牧子　はあ。

刑事――と申しますのは外でもございせんが、此方様では、當時本郷の根津に住んで居りまする歌劇俳優の山田禮二と云ふ者を、御承知でいらつしやいませうか？

牧子　はい、一往は存じて居ります。

刑事　えゝとそれでその、――甚だ立ち入つた事をお尋ねするやうで、恐縮に存じますが、その者と此方様はどう云ふ御關係でいらつしやいませう？

牧子　關係と申ししても、唯今ではその山田と申す者と私共とは、直接には何の關係もないやうになつ

て居ります。——一二年前には出入りを致したこともございますけれど、私どもの家庭に對していろいろ面白くない事などがございまして、それ以來出入りを差し止めましたのですが、——しかし、それには少し込み入つた事情がございしますので、御用向きに依つてはお話も致さなければならぬと存じますが、何かその事に就いて、お取り調べの必要でもおありなさるのでございませうか？

刑事 實は何でございませう、その山田と云ふ人間は一體平生の素行などにもいかゞはしい點がございませうので、かねてから警察の方で目を附けて居りましたのですが、今度詐欺を働きましたので訴へられたのでございませう。就きましては、その山田と同棲して居ります山田澄子と云ふ婦人は、何か此方様の御縁つゞき、——此方様のお嬢様だと云ふやうな事を、世間で申して居りますので、事實どう云ふ御關係でいらつしやいますか、一往その邊のところをお伺ひ致したいのでございませう。

牧子（伏目がちに）それは確かに、澄子は私の娘でございませう。——

刑事 はあ、成る程、——さう云ふお話でございませうと、此れは是非ともお耳へ入れて置かなければならいませうが、山田が詐欺をした相手と云ふのは或る高利貸でございまして、その男は山田よりも寧ろお嬢様の方を信用して、——何しろ此方様が御實家だと云ふので、山田に金を貸したのだと申して居ります。

圭之助 しかし、山田は何と云つたか知りませんが、母にしろ私にしろ、唯今では澄子に對しても山田同様に、もう縁のないものと認めて居るのです。あれが今更實家の名などを擔ぎ出せる譯はないのです。刑事 いや、或はさう云ふ御事情ではなからうかと、お察し致して居りましたのですが、兎に角證書の上

ではお嬢様が連帶債務者になつて居られますので。——それも、まあそれだけならば別に差し支へはございませんやうなものゝ、山田が詐欺を働いたとなりますと、勢ひ連帶者の方へも關係が及んで參るものですから、——

牧子（憂惧に堪へぬ顔つきでチラリと圭之助の方を見ながら）では何でございませうか、澄子が山田と一緒にゐて、詐欺をしたとでも云ふやうな事が、……

刑事 いえ、決してさう申すのではございません、さうお取りになつては甚だ困るのでございます、勿論お嬢様は御存知ない事に違ひないのでございますが、……

圭之助 全體その詐欺と云ふのはどんな事なのです？ あの男が詐欺を働くのは、別に珍しくもないんですかね。

刑事 事實は斯うなのでございます、何でも山田が寶石入りの指環などを三つ四つ持つて參つて、此れは女房——（と云ひかけて急に云ひ直す）お嬢様の物だからと云つて、それをかたに三百圓貸してくれと云ふやうな話を致しましたので、——先程も申し上げた通り、貸す方では澄子様のお名前もある事ですし、指環にしても定めし性の確かな品だらうと、ついさう思つたので貸してやつた、ところがその指環はお嬢様の物ではないので、仲間うちの女優の物を、まあ盗んだも同様の手段で、持つて來たのだと云ふ事が分りましたのです。尤も、貸した方では金さへ取れば指環はどうでもよいのでございますが、やり方が如何にも惡辣で、最初から詐欺の目的でやつたものとしか思はれないと云ふので、そのまゝでは濟まされなくなつて參つたのです。